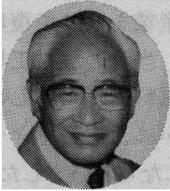


# 林産試験場設立の原点を振り返る

小林庸秀氏との懇談会より



林業指導所（現林産試験場）の設立と、その運営に非常な情熱を傾けられ、今日の林産試験場の基礎を確立された小林庸秀さん（前北海道林業会館理事長）を囲む懇談会を開催し、林産試験場の設立の原点について大いに語っていただきました。その内容を要約の上紹介いたします。

（編集委員会）

**司会** 本日、小林さんがフリーな立場でご来場されるとの報告をきき、研究員から、是非先輩のお話を聞きたいとの要望がありまして、予定外の懇談会を開くことになりました。小林さんも快くお引き受けいただきまして、誠にありがたく思っている次第でございます。

ついては、小林さんが日頃お考えになっていること、当场設立の主旨、背景、あるいは、後輩に対する要望など、何でもよろしくございますから、先ず、口火を切っていただきたく存じます。

林業指導所の誕生……

**小林** 当試験場は、いつも思い出されるなつかしい場所でありまして。現に、この部屋を見回しても、天井・壁・床ともに当時のままであり、場員の顔ぶれは変わったにしても、当時を思い出させる本当になつかしいものが、多々見受けられます。

この林産試験場は終戦直後の昭和20年10月に計画が始まり、22年に設計が完了、24年には、開設準備のため一部のスタッフが現地に入り、そして25年8月、正式に林業指導所として発足したのであります。まず、何故この様なかわった研究所を作ったかについてお話をしたいと思います。

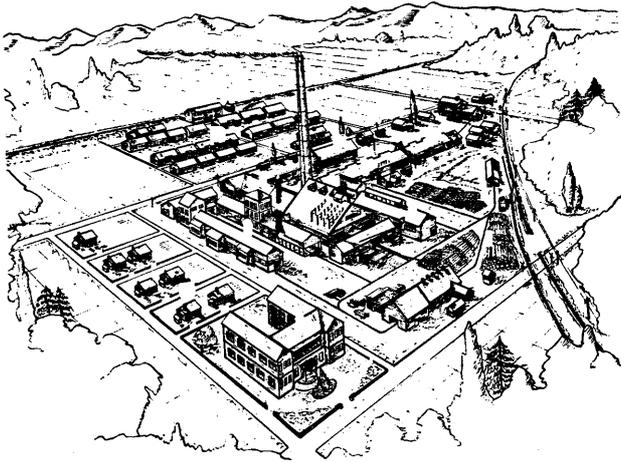
私は、18年に野幌の林業試験場に入りまして、軍需省に出向して、木製飛行機用の木材をあつめる仕事をしておりました。原木は、北海道のエゾ・カバ・ナラ・イタヤなどの大径材であり、今の王子製紙江別工場で“疾風(はやて)の木製機”を

3機作りました。しかし、この飛行機の細部木取りが非常にむずかしく、野幌の林業試験場員を総動員してその研究をさせました、しかし、実際に、製材機械を運転して指導するとなると、その様な人がいない、しからば、学者は？というと実際の指導ができない、という非常にちくはくな状態でありました。

戦争がおわりまして、私は、「これからの日本は、武力を放棄して、発展しなければならない。そのためには技術が重要である。特に、木材産業は、平和産業として大いに発展しなければならないし、そのためには産業にすぐ役立つ研究機関が必要だ」と北海道長官に直訴しました。

私の、この研究機関に関する構想は、研究棟は中央に研究室、周囲に工場を配置して、そこで技術者、技能者を養成し世に送り出すことでした。研究は目的研究を指向し、基礎、応用研究の別を問わず、一定の目的をもった研究にまい進させました。そして、期間も非常に短いものにしました。なぜこの様にしたかという、ひとつには、当時の産業界が、早急な成果を要求していたということがあったんです。

発足当初は、人材の配置も未整備でありました。そこで、大学で我々の目的とする研究をやっている先生方の弟子を採用することにしました。したがって、いろいろな大学・高校から人材があつまり、そして、逆に、出身校の先生方にずい分たすけてもらいました。



創立当時の林業指導所  
(一部構想中の建物を含む)

また、欧米にて出来上がったものを模索する時間的余裕もなかったため、とにかく先進技術の実態を学ばせるために、翌年、化学部長を世界各国に派遣しました。内部には、企画室を設置して、つとめて内外の情報を集収いたしました。

これらは、確立している技術は金を出してでも学び、1日でも早く欧米なみの水準まで到達させて、林業王国北海道にふさわしい、先進的な林業指導所を育てるためでありました。

何の役に立つかはわかりませんが、こんなところからお話をしてみました。

A 指導所の研究の方向として、当面は欧米の水準に、そして、それから、指導所独自のものを、ということでありましたが、小林さんからみてその後の展開は？

小林 私の時代では、欧米の水準にまで達しなかった。しかし、その後は黒田元場長が大変良くやってくれたと思っています。

廃材利用研究所.....

B 指導所は世界的に有名な機関だと聞いて入所しましたが、欧米の評価の実体はどのようなものだったのでしょうか？

小林 私は24年まで道の林政調査室長をやっておりまして、GHQが3カ月に1回の割で、北海

道の資源と木材工業の実態を調査しにくるたびに、案内をしておりました。あとでわかったことですが、彼等は、マジソンの研究員だったんです。25、26年と指導所ができてからもひんぱんにやってきました。

私は、1つの大きな夢を持っていました。それは、日本を木材産業を通じて復興するのだということです。当時の製材工場では、原価の中で労賃、原料代の順にしめる割り合いが大きく、いかに、それをきりつめるかが、1番の問題になっていました。

私は、それよりも、廃材・副材にどの様に価値をつけるか、また、北海道の低価値材をいかにして有効につかうかが重要なのだ、と考え、“木材バタ屋の親方”として

の廃材利用研究所にしようと考えました。

だから、ボイラーも石炭ボイラーにして、木材をたかない様にしました。すると、廃材が山の様につまれる、そこで所員に、早くこの廃材を利用する研究をやれ、と尻をたたいたものです。GHQにも、「ここは、廃材利用研究所だ」と、言ってやりました。

アメリカを回ると、すべてがマジソンでありました。これもマジソンに聞け、これは、マジソンにある、との事でした。マジソンの飛行場につくと、大きな看板に、「廃物利用研究所・マジソン」と書いてあるではありませんか。アメリカの様な金持の国でも、廃物の利用を真剣に考えているのだな、と1つおどろき、また、3カ月に1回視察にきていたGHQが、マジソンの研究員だった事を知り、さらにおどろきました。「旭川の研究所でやっている方向は、われわれと同じだ、手をくんでやろうじゃないか」と言われ、非常によく帰ってきたものでした。

もう1つは、スタートしたばかりの指導所は、若い経験のとぼしい者ばかりのうえに、蓄積もなにもなかった訳です。一方、金を出す側の道議会では、製材工場の社長出身の議員から、「おれ達が20年も30年もかけ、血と汗できずいてきたものを、青テーブルにすわっている役人なぞにわかる

か！」といわれて、なかなか予算がつきづらい状況にありました。私は、「一年たつと、あなた方が、見たこともない様な成果を出しますから、その時はおどろかないで下さい。」とあって、予算をつけてもらったものです。

一年たつと、成果を見にくるのがはっきりしているの、私は、新人をいろいろな大学のいろいろな先生のところから採用する事にして、その新人の出身校の先生を利用することにしました。その方法は、新人の働きぶりを見に来た先生方にどんどん依頼研究をお願いする事です。

その結果、1年たつと、成果がどんどんあらわれて、道議会も納得し、その成果を英文でどんどん世界中にばらまきました。その結果、世界的にも、「旭川の研究所は、いままでとちがう研究をしているんだな」という評判がたったわけです。苦肉の策ではありましたが、それがあたりました。

#### 林産試験場の進路.....

**司会** いままでとちがう研究というのは、工場に密着した研究という事だと思えますが、その点で言えば、もっとも密着しているはずの中間工業試験が、歳入をあげるための生産運転が主になって、マイナスの面があらわれてきてしまっている。そこで、現場では数年来、歳入をあげるための生産運転をおさえる様にしているが、根本的な再検討が必要だと考え、新しい整備計画では、中間工業試験のあり方を最重点課題と考えております。さらに、この整備計画に関しては、今後場の研究の方向としては、もっと製品のユーザーサイドに立った研究を行っていきたいと考えておりますが、小林さんのお考えは？

**小林** いままでのお話は、これまでの30年のなしであり、今後は、業界の実態に即して、おおいに変化していくべきだと思います。

**C** 林産試では、いろいろな新製品を開発しておりますが、これらの販路について、公設研究機関としてどの様に拡大・確立していかなければならないと思えますか。

**小林** それは、業界との直結の問題と考えられ

ます。私は、ハードボードをやった時、大成や、三井にいて営業マンの様な事をしたものです。すべての研究員がその様な事はできないので、営業担当の様なセクションが必要だと思います。

**B** 業界の人との話し合いがあって、「その時に、業界のレベルからいって、どの様な新製品ならくらいつけるか？」と質問したところ、「それを考えるのが林産試だよ」と言われた。この様な業界の対応については？

**小林** その様な体質が、一番問題です。業界は、技術を向上させて1割もうけるより、商売でもうける事ばかり考えてきた。何故その様なことになるかという、それは、流通機構の整備がおくれている事が原因だと思います。その例は、3ちゃん工場が一番もうかると広言する様な業界のかなりトップの人がいるという事にもあらわれています。また、どの様な新製品ならもうかるか、もうからないかは、経営手腕の問題で、そこまでかわりあわなければならないのなら、林産試は成立しえないし、かわりあえるのは、せいぜい原価計算まででありましょう。

**司会** 新製品・新技術については、試験場は、メニューを提供すれば良く、その中から、業界がえらば良いと思う。が、実際にはえらんでくれない。したがって、ある程度めぼしをつけてプッシュしなければならないと思いますが？

**小林** それは、危険だ。おしつけられてやると、自分ではじめるのでは意欲がちがいます。

**場長** 業界との連携方法は、3つあると思えます。この連携プレイが、内的には研究員の意欲となり、外的には、試験場の評価になってくるでしょう。

(1) 現在のレベルのニーズについては、場の成果が、直ちに、業界に行くかについて疑問がある。そこで、研究から、業界をバイパスしてユーザーに結びつき、ユーザーサイドから、逆に業界へバックしていくという方法が一つ考えられる。

(2) 自主開発力のとぼしい部分については、試験場の成果をわかりやすく普及する。

(3) 自主開発の能力のある企業については、常

時、研究会、共同研究をすすめる事により、将来に向けた企業化の芽をそだてる。

この様な三つのてだてがあるのではないかと思います。

D 現在の業界のニーズに対応する研究も必要であるが、将来に向けた研究も必要ではないでしょうか？。かつての技術空白の時代と状況もことなっております。今後は、高度化社会に対応する高いレベルの蓄積をし、業界ニーズの対応と内的蓄積との両にらみの形で展開していくという視点も重要であると思います。

小林 業界との連携も重要であるが、行政との連携も重要です。マジソンでは、行政も入ってテーマの選定をしているとの話も聞いているが、指導所もスタートの頃は、林業指導所運営委員会というものを作りました。そして、そこで1年間の業績の発表等をしたが、形式に走ってしまう事も多い。行政と、しっかり手を結んで、試験場の成果を行政にプッシュしてもらおうという事も重要です。

司会 行政との積極的なかわりという事につ

いては、まだ、欠けています。また、業界のニーズの質にもいろいろあり、「カラマツなぞはやらなくていいから、広葉樹をやってくれ」とか、「そんな事より、技術指導をしてくれ」、「いや、もっと先に向けた事をやってくれ」とかいろいろあり、ニーズのすいあげ方や、共同研究のすすめ方について現在、いろいろ検討しています。

場長 当场発足当時には、やはり、運営委員会が持たれ、事情により中断されているようですがふたたび設けるように、今、検討をすすめています。

小林 林業と結びつく事も重要です。現在の林業は、林産と結びついていないため、目標をしぼった生産となっていない。電柱なら電柱、パルプならパルプと、その目的に応じた木の育て方があるはずだと思っています。

司会 本日は、日頃きけない様な貴重なおはなしを伺うことができ、大変勉強になりました。今後も、年に何度かは、おたちよりいただき、この様な機会を作っていただければ、幸いです。